

組織と情報コミュニケーションにおける 「影響関係モデル」の提案

Proposal of "Relational model of being influenced" in
organization and information communications

2006.02.26

情報コミュニケーション学会

飯箸泰宏*

Yasuhiro IIHASHI

矢ヶ部一之**

Kazuyuki YAKABE

*明治大学

Meiji University

**跡見学園女子大学

Atomi University

1. 問題意識

- ★ 「情報コミュニケーション」の存在意義を情報社会組織論の立場から説明する人は少ないようである。
- ★ 「情報コミュニケーション」はいかがわしいか？
- ★ 有効な情報、有効なコミュニケーションとは、元来「あやかし」や「洗脳」「催眠」「錯覚」が目的ではなかったはずである。
- ★ 「組織」なくして「情報コミュニケーション」はなく、「情報コミュニケーション」なくして「組織」は成立しない。
- ★ 「情報コミュニケーション」の新しいモデルを情報社会組織論の立場から提案する。

2. 社会組織のモデル

- ★ 情報コミュニケーションは、社会組織の仕組みの中で理解されるべきである。
- ★ 「情報」や「コミュニケーション」の存在理由は、社会組織の成立を保証する不可欠な要素であるからである、と思う。
- ★ 「情報コミュニケーション」から華やかなイメージの衣を剥ぎ取って、「影響関係」という地についての概念で改めて捉えてみたい。
- ★ われわれは、「情報コミュニケーション」は、社会の究極の目的のための僕(しもべ)である、と主張する。

社会は、ネットワークとメタ組織でできている

国民国家

ネットワークとメタ組織は、いわば社会の横軸と縦軸

矢印は、影響関係。主に、直線はメタ関係/曲線はネットワーク。

メタ組織は、抽象化を経て、国民国家に統合する。

それぞれの組織は、構成員が変わっても組織である。組織は、定常流的実在である。

人は、いくつもの組織に同時に参加できる。

上部団体の上部団体、メタメタ組織

上部団体、メタ組織

上部団体、メタ組織

ネットワークは、時としてメタ組織の範囲を超えてゆく。

ユニット=単位組織(班、グループ)

- ★ 社会の究極の目的は、ヒトの悠久たるを実現することである。
- ★ 組織は、社会の目的に合致する固有の目的を持ち、社会に貢献することによって、社会から対価を得て、安全を保証されている。
- ★ 人は、その組織に1つ以上役に立つことによって、その組織から生存に必要な対価と安全を保証される。仲間は互いに助け合う。
- ★ 単位組織は、メタ組織およびネットワークに所属する。メタ組織とネットワークは自身に貢献する限り、自身に所属する個人と組織を、助ける。
- ★ 貢献し、助け合うためには、互いに影響力を行使しあわなければならない。
- ★ 相互の影響力行使こそ、情報コミュニケーションの存在理由である。

3. 従来のコミュニケーションモデル

(1) シャノンとウィーバーの線形モデル

クロード・E・シャノンとウォーレン・ウィーバーによる「コミュニケーションの数理的理論」(1949年)

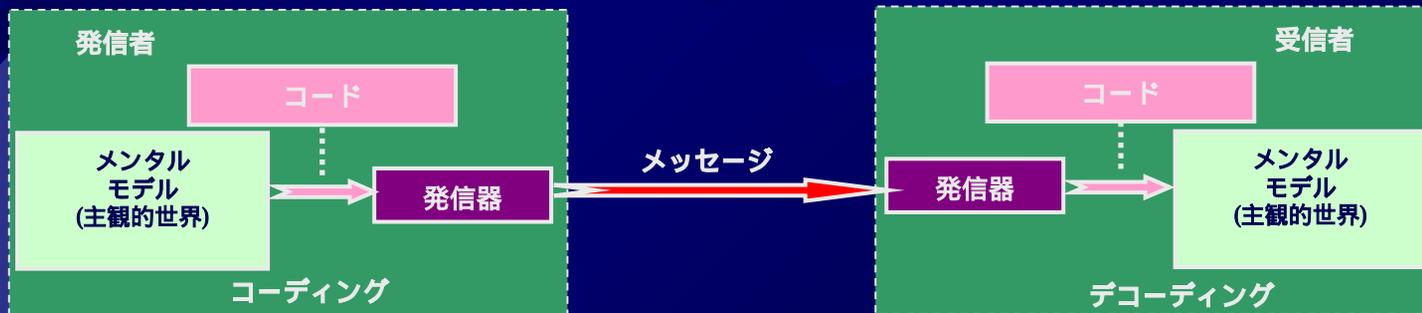
「情報源」 「送信機」 「通信チャンネル(+雑音源)」 「受信機」 「対象目的」



一方向性、伝達されるだけ、メンタルモデルなし

(2)メンタルモデルの登場

シャノンによるメンタルモデル 黒川 隆夫による「ノンバーバルコミュニケーション」オーム社(1994)より



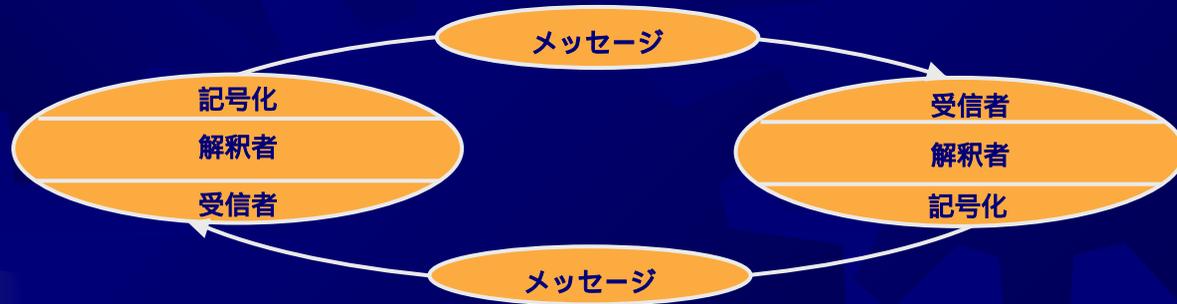
一方向性、メンタルモデルに届く

(3) 循環モデルの登場

ウィルバー・シュラムによる円環モデル

ウィルバー・シュラム「マスコミュニケーション過程と効果」1954年

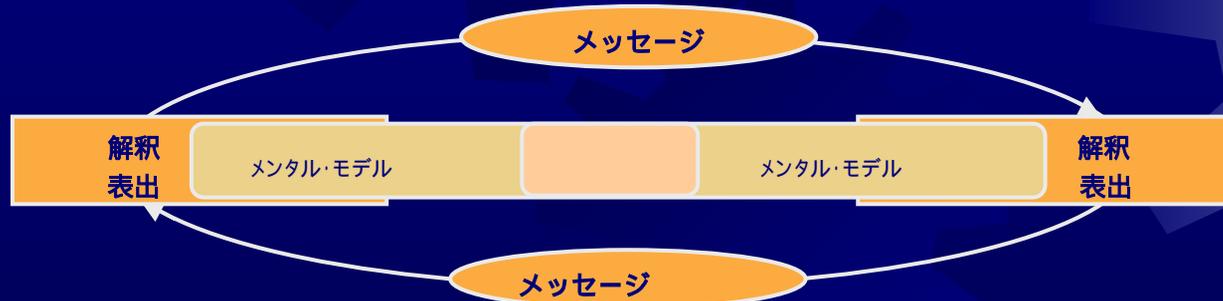
Schramm, W. (1954) 'How communication works.' In Schramm, W. (ed.) *The Process and Effects of Mass Communication*.



フィードバックあり、メンタルモデルなし

黒川による「メンタルモデルに基づく円環モデル」

黒川 隆夫による「ノンバーバルコミュニケーション」オーム社（1994）



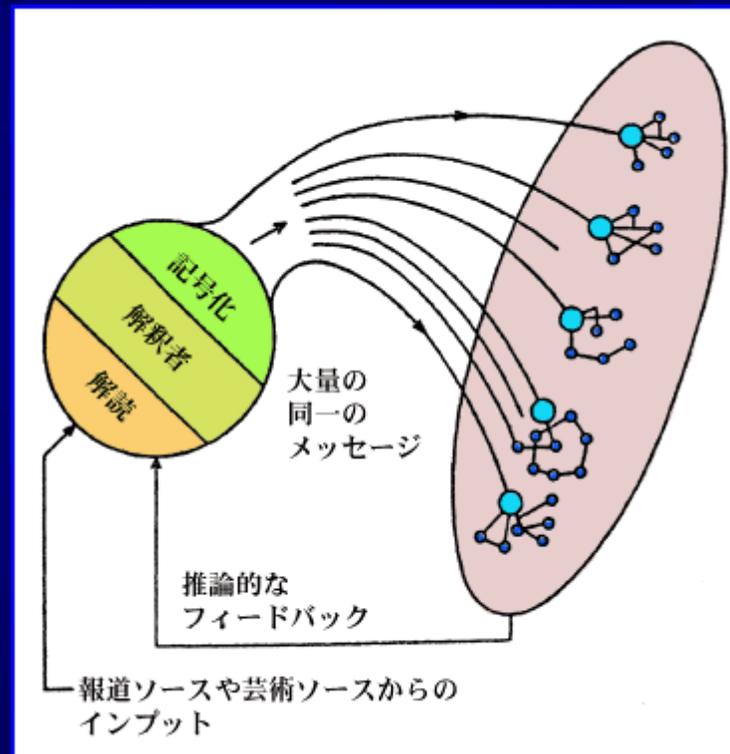
フィードバックあり、メンタルモデルあり

(4) マスコミ理論のモデル

たくさんあるが、それまでのモデル組み合わせや改良である。

市川昌、「コミュニケーションと文化」<http://www.edogawa-u.ac.jp/~aitikawa/commu/index.html>
(電子媒体、2006.1.12確認)

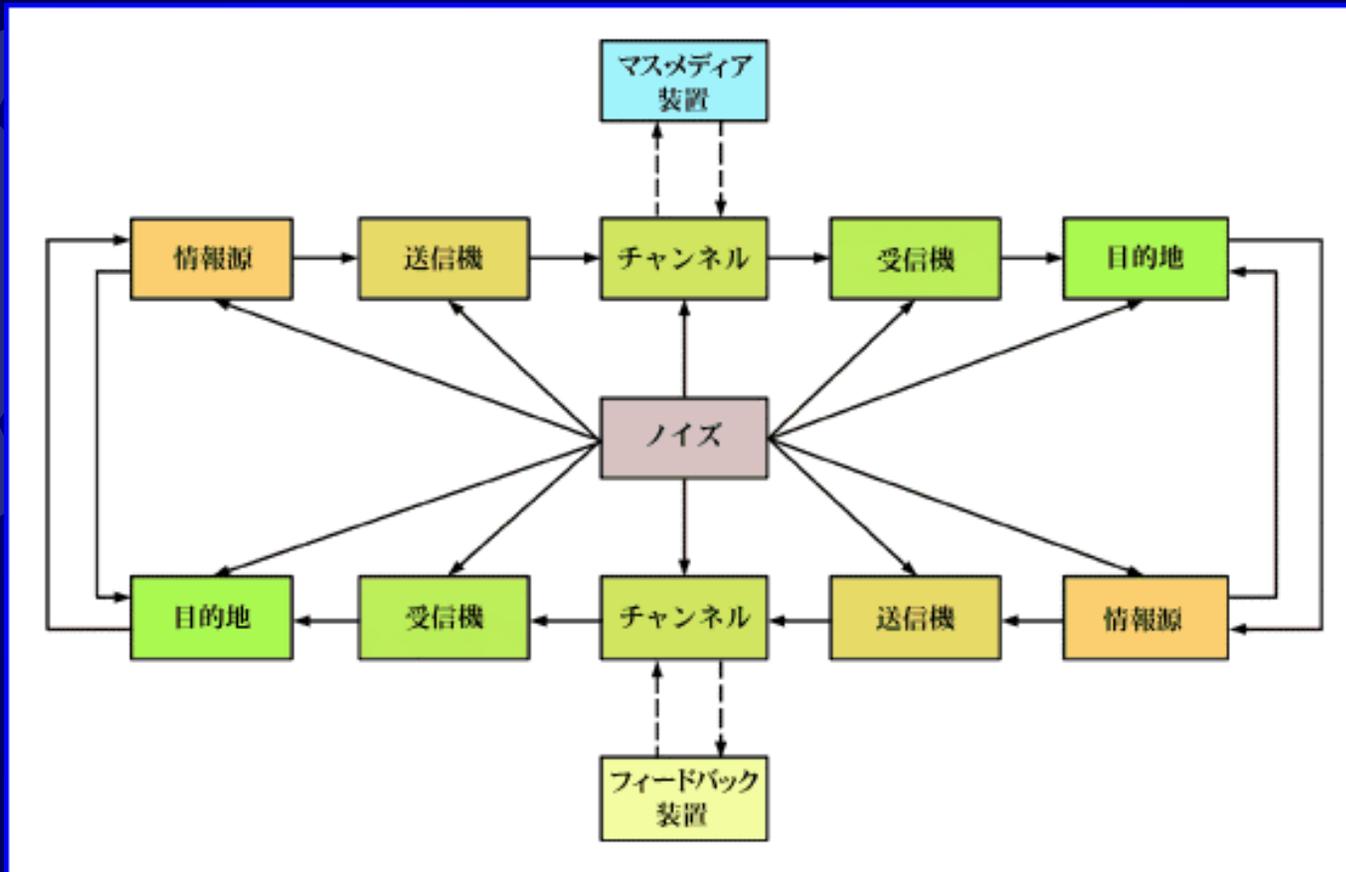
シュラムのマス・コミュニケーション・モデル (1954) <http://www.edogawa-u.ac.jp/~aitikawa/commu/mass06.html>



推論的フィードバックあり、メンタルモデルなし

市川昌、「コミュニケーションと文化」 <http://www.edogawa-u.ac.jp/~aitikawa/commu/index.html>
(電子媒体、2006.1.12確認)

ド・フルールによるコミュニケーション・モデル (1970) <http://www.edogawa-u.ac.jp/~aitikawa/commu/mass07.html>



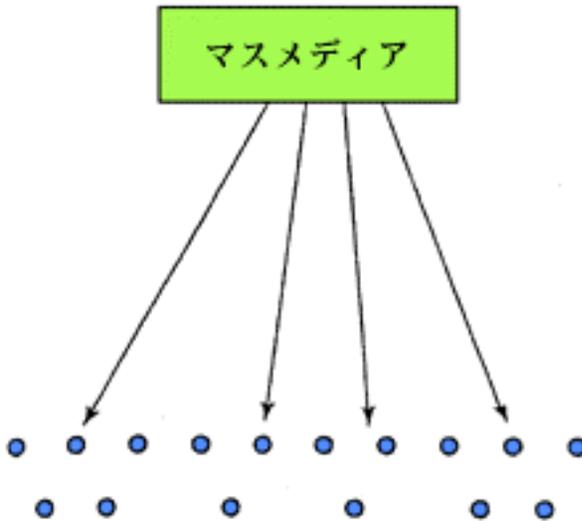
フィードバック装置あり、メンタルモデルなし

市川昌、「コミュニケーションと文化」 <http://www.edogawa-u.ac.jp/~aitikawa/commu/index.html>
(電子媒体、2006.1.12確認)

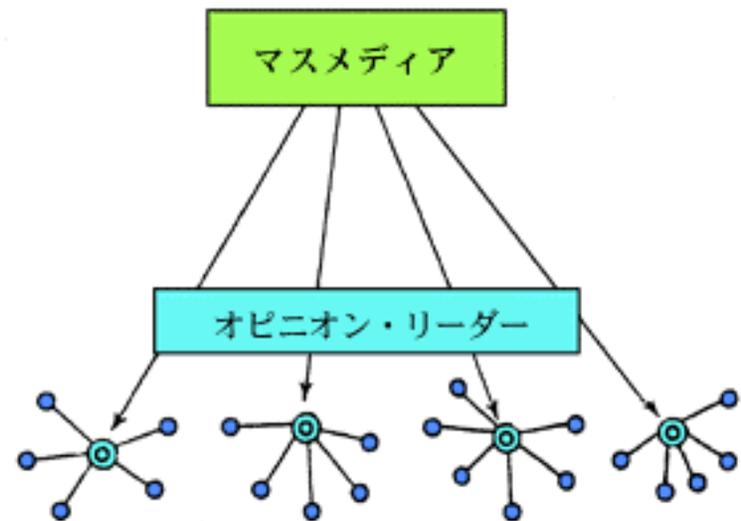
これまでのマスコミ・モデルと2段の流れのマスコミ・モデル (P.ラザースフェルド、E. カッツ)

<http://www.edogawa-u.ac.jp/~aitikawa/commu/mass08.html>

①これまでのマスコミ・モデル



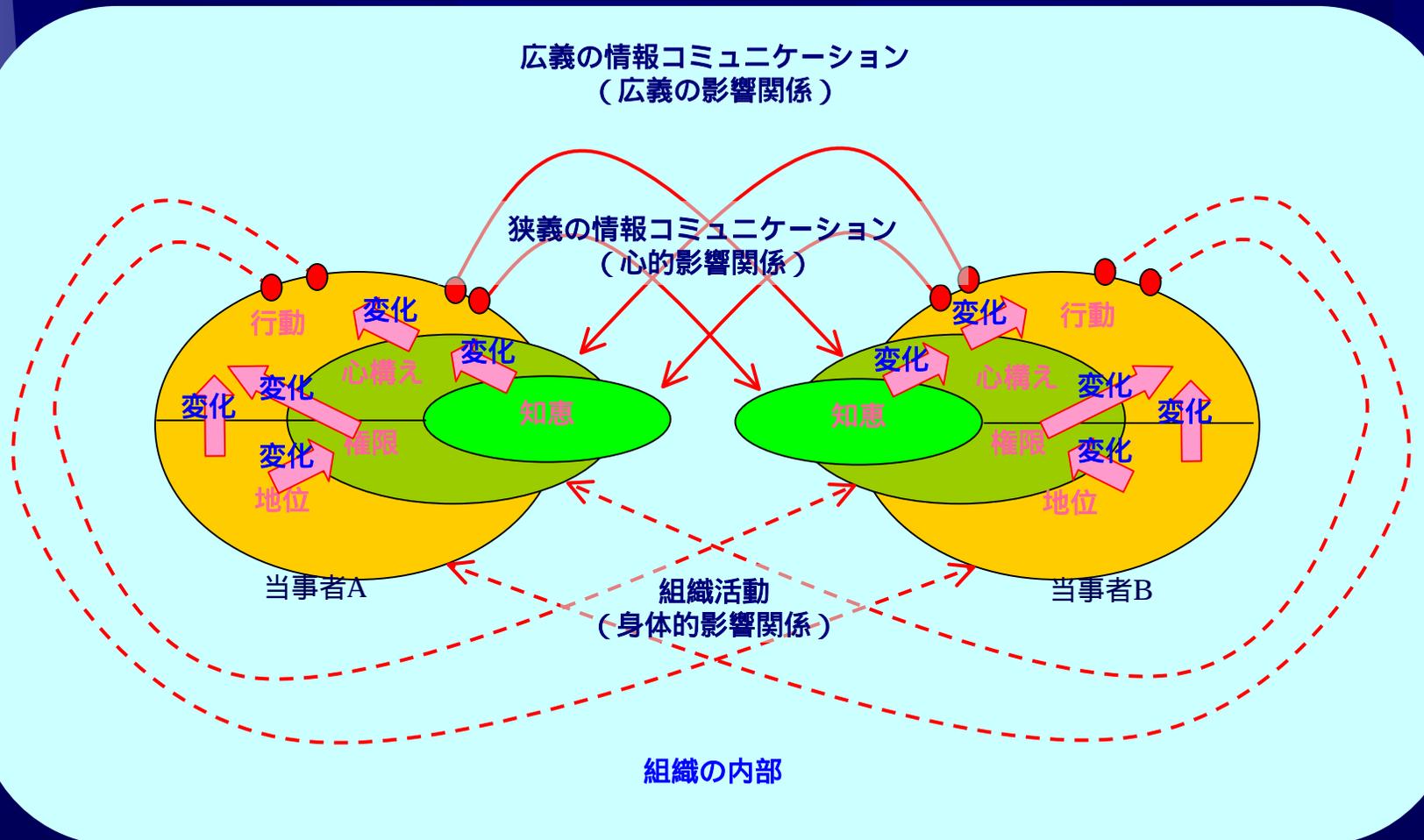
②2段の流れのマスコミ・モデル



一方向性、オピニオンリーダーの介在、メンタルモデルなし

4. 影響関係モデル

- 正常な組織を維持するための「影響関係」--互いに变化し合う関係の不可欠の要素である。



影響関係モデル補足

● 心的影響関係

(狭義の情報コミュニケーション)

対話、会話、通信、…。

ひとまず、心的な影響のみで身体的強制を伴わないが、心的強制力は伴うものと考えられる。

● 身体的影響関係

(広義の情報コミュニケーションを含む)

多数決、除名、権利制限など、社会運動、政治運動…。

ひとまず、身体的な影響のみで心的強制を伴わないが、身体的強制力は伴うものと考えられる。

● 複合的影響関係

(通常の情報コミュニケーション)

通常は、多かれ少なかれ、心的・身体的影響関係は複合的に生ずる。

複合化を許さず、心的影響関係または身体的影響関係だけに純化することが紳士的に見える。心的影響力から心的強制力を排除すること、身体的強制力から身体的暴力を排除することは、平時においては、期待される。

理念と現実は異なっている。

5. 情報コミュニケーションとは

- ★ 「情報コミュニケーション」は、社会の究極の目的のための僕(しもべ)である。
- ★ 「情報コミュニケーション」は、狭義には心的影響関係であり社会的影響関係のの半分である。もう半分は身体的影響関係にある。広義には、心的・身体的影響関係が含まれる。
- ★ たとえば、神聖にして不可侵のように見えるマスコミも、社会正義に合致したり反したりすることによって、言論によってだけではなく、人々による社会運動、政治活動等の組織的活動によって、その地位や権限が高められて保証されたり、低められて剥奪されたりする。

(補)「情コミは教えるべきではない」か？

- ★ 「あやかし」「洗脳」「催眠」「錯覚」などを駆使することを、「情報コミュニケーション力」としてもてはやす向きもある。しかし、これらを悪用するのは邪道である。社会と社会組織の目的を逸脱してはならない。

http://shyosei.cocolog-nifty.com/shyoseilog/2005/12/17_9846.html

- ★ 「情報コミュニケーション力」は不要だと主張する向きもあるが、前者があまりにもあざとい故の反動であろう。
- ★ 社会と社会組織の正しい目的のためには影響関係が不可欠であり、そのためには「情報コミュニケーション力」は必要である。
- ★ 「情報コミュニケーション力」は、「社会と社会組織の正しい有り様」とともに、青年たちには正しく教育されるべきであると考える。
- ★ 「情報コミュニケーション」の正しい理解のために、ここに影響関係モデルを提案した。
- ★ 「情報コミュニケーション力」は、正しく教育されるべきである。



終わり